

たべ・きょうこ 1967年、室蘭生まれ。東京芸大、ベルリン芸大を経て、同大大学院を修了。エピテール国際ピアノコンクール第1位、シヨパン国際ピアノコンクール最優秀演奏賞、ミュンヘン国際音楽コンクール第3位など国際的に高い評価を得る。その後、バイエルン放送交響楽団、モスクワ・フィル、ワルシャワ・フィルなど各国のオーケストラと共演。現在、桐朋学園大学院大学(富山市)教授も務める。



札幌での演奏会は2014年のCDデビュー20周年記念リサイタル以来。「5年ぶりの札幌は楽しみ。大好きなものですから」と語る田部京子さん(富田茂樹撮影)

ピアニスト・田部京子さん

四半世紀 シューベルトとともに

20代前半から国内外の第一線で活躍する室蘭出身のピアニスト田部京子さん。これまで出したCDは30枚以上になり、そのまま彼女が歩んできた演奏家としての軌跡を示している。今年にCDデビューから25周年に当たり、各地で記念のリサイタルを行う田部さんは、今も自らの音を追求め続ける。

(編集委員 石井晃)

11月3日、札幌・キタラ、12月19日、東京・浜離宮朝日ホール。両会場での演奏曲目は、田部さんは同じ曲を選んだ。いずれも演奏家生活で大きな意味を持ち、CDにも収めた作品だ。その1曲、シューベルトのピアノソナタ第21番は、31歳で亡くなった作曲家がその若い晩年に発表し、一連のピアノソナタの中でも特に評価が高い。田部さんがこの曲を入れたCDを出したのは1994年。前年のデビューアルバム「シヨパン」から数えて3枚目に当たる。「当時、20代の女性のデビューと言えば、シヨパンのイメージ。3枚目にして弾きたいものを選んで」と笑う。

「シューベルト」のタイトルを冠したCDは自身最多の計7枚を数え、田部さんの代名詞とも言えるべき作曲家だ。中でもピアノソナタ第21番は、「常に自分の近く」にあり、対話を続けてきた」という。2016年放送のNHKドラマ「夏目漱石の妻」では、彼女の弾く第1楽章が作中でたびたび流れ、話題になった。

最近、21番を収めたCDを聞き直したところ、弾き方の変化に気付いた。現在の演奏を森にたとえ「葉っぱは一枚一枚の美しさが分かった上で、全体のフォルムの美しさが見えてきた」と表現する。「当時は作品に愛情があっただけ、内包されているもの

自分の音に耳を澄ませて

全てを表現しなかった。時間を経て、細部までこだわって美しさを表現するといふよりは、もう少し全体像を俯瞰して向き合えるようになった」という。今回のリサイタルでは、シューマンの交響的練習曲(連作変奏付き)も弾く。高3で出場し第1位に輝いた日本音楽コンクール(84年)や、ニューヨークデビュー(97年)の際にも演奏した「特別な曲」だ。96年、この曲を録音するため訪れた東北地方で交通事故に遭い、むち打ちの症状が出た。新進ピアニストとして国際的に注目され、多忙な日々を送っていたところ、ドクターストップがかかり、半年ほど休養した。「いつ非日常が訪れても悔いがないようにしていないと駄目。今日の演奏が最後になって良かったと言えるよう全力投球したい。そう思った。ありがたいうちに、それから20年以上。ここまで続けてこられた」

ピアノは4歳で始め、5歳から室蘭を離れる中1までは地元でのピアノ教師鈴木時子(今今年2月死去)に習う。この間、国際的ピアニストの故田中希代子さんの指導を受けるため、鈴木さんに連れられ、東京の田中さん宅を初めて訪ねた。膠原病を患い30代で一線を退いた田中さんのレッスンは口伝で行われた。田部さんの演奏を田中さんが聴き、「正しい音を出す」と「そう、それでいいよ」と褒められた。田中さんは「自分の耳が一番いい先生」と繰り返し、レッスンは神経を張り詰めて臨んだ。「先生が求める音はどのようなのか、自分で判断し、探っていくかなければならない。それを小さい時から訓練され、すごく貴重だった。自分の音に耳を澄ませるといふか。演奏家、音楽家としての最も基本かな」

演奏のCDはほぼ毎年、1、2枚ずつ制作し、9月下旬に出した「グリーグ」で計35枚。クラシックの演奏家でもめったにない枚数で、人気の証でもある。本人は「そんなに出したかな」と意に介していない。一方で「レコーディングは本心に勉強になる。それを越える」と皮むけるではないが、何かが違っていると強調。これからは、自らの理想とする音を形にしていこう。

◇ 札幌・キタラでのリサイタルは午後1時半開演。5千円。問い合わせはオフィス・ワン011・612・8696へ。

